

今回から「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです

やせても枯れても一国一城の主、城を売り渡すことはできない (キャノン創業メンバー 御手洗 毅)

御手洗毅は 1942 年 (昭和 17 年) 9 月、精機光学工業 (現・キャノン) の初代社長に就いた。その就任式で社員たちにこう語りかけた。「自分は諸君がご存知のとおり医者出身だ。もし僕をだまそうとすれば、それは諸君にとって赤ん坊の手をねじるようなもので、いとも簡単にできる。僕は君たちを信用する以外にない。経理の担当者が帳面をごまかそうと思えばできる。工場長が一万円の機械を買っても、僕はその機械が一万円なのか一万五千円なのかもわからない。しかし、そんな事をやっていけば会社は潰れる事は火を見るより明らかだ。そしてその責任は社長の私にある。私ともども、この会社を繁栄させていこうと思えば、みんなが誠心誠意やる以外にないのではないか」御手洗毅は産婦人科の医師から経営者に転じた変わり種である。大分の生まれで、親兄弟、親族すべてが医者である。古くからの友人で、同社の最高責任者であった内田三郎がシンガポール司政官として赴任することになったため、創立メンバーの一人だった御手洗が社長に引張り出された。御手洗によれば、「ちょっとしたはずみ、というしか言いようがない」ことだった。ドラマの発端は 1933 年 (昭和 8 年) にさかのぼる。「敗戦国ドイツにしてライカ有り。日本は紡績で世界に肩を並べるまでになったが、精密工業なくして発展なしだ」日赤の勤務医だった御手洗は、友人の内田三郎、吉田五郎とビアホールで飲んでいて、酔いが回ってきた勢いで、自分たちの手で、ライカのようなカメラをつくらうという話に発展した。中心人物は元来、機械いじりが好きだった吉田五郎で、ライカのような高級カメラをつくるためには、多額の資金が必要となる。吉田が創業パートナーに選んだのが、内田である。吉田と内田は精機工業研究所を旗揚げした。翌年、内田の大阪時代の部下、前田武男 (第二代社長) が加わった。1934 年 (昭和 9 年) 国産初の 35mm レンジファインダーカメラ「KWANON=カンノン」を試作した。価格は 200 円。カンノンと命名したのは、吉田が観音教の信者だったからだ。やがて語呂のいいキャノン (CANON) と呼び方が変わり、本格的に市販した。しかし、内田の知り合いで、個人的に技術指導に来ていた山口一太郎陸軍大尉と吉田の折り合いが悪く、わずか 1 年で研究所を去った。高級カメラは、そこそこ売れるようになり、御手洗らが発起人となって 1937 年 (昭和 12 年) に精機光学工業株式会社を設立した。社長を置かず内田が専務となった。御手洗も役員だったが、常勤でなく監査役となった。1941 年 (昭和 16 年) に太平洋戦争が始まると、専務の内田が司政官としてシンガポールに転出。トップが不在となったため御手洗が病院を畳んで社長を引き受けた。御手洗は経営の素人と公言していたが、この“ドクター経営者”はなかなかのものだった。高級カメラに固執し、「打倒ライカ」の旗を掲げた。御手洗が初めて渡米したのは、講和条約の締結前の 1950 年 8 月である。鞆の中には、「打倒ライカ」の夢をかけた試作機が収まっていた。ライカにもない「一眼式連動距離計機構」「レール直結フラッシュ装置」を備えた 35mm カメラである。シカゴのベル・アンド・ハウエル社に全米の販売代理店になってもらうべく乗り込んが、返ってきた反応は冷たかった。「技術面と営業面から検討した。これはライカより数等上のカメラであると評価できる。これがもしドイツ製ならホットケーキのように売れるだろう。気の毒だが、これはメイド・オキュパイド・ジャパンである。我が国では通用しない。キャノン・ブランドでなくベル・アンド・ハウエルにするなら扱ってもいい」オキュパイドとは、占領下という意味だ。御手洗は、激怒した。「やせても枯れても一国一城の主、城を売り渡すことはできない。何を馬鹿なことを言う。日本に精密工業を興すためにキャノンをつくったのだ。自分で産んだ子は自分で育てる」10 年後の 1960 年 (昭和 35 年) 日本のカメラ生産額は米独と肩を並べた。あのベル・アンド・ハウエル社のほうから「キャノン製品をわが社に売らせてほしい」と要請してきた。「あの悲哀から 10 年。長かったとも、よくぞ 10 年で (ここまで来たか) とも思う。敵は軍門に下った」御手洗の心境はいかばかりだろう。御手洗のカメラは、世界を制覇したのである。

御手洗氏の前職は何でしたか？

( )